

育ち盛り、食べ盛りの五郎は、栄養失調と疲労から熱病にかかつてしまひました。高熱と寒さと飢えにさらされながらも、ふとんもなく米俵にもぐつて苦しむ、四十日間も病気がなおりませんでした。

厳しかった下北の冬もやがて峠を越し、田名部川の氷も少しずつゆるみはじめました。ある日一人の獵師が、氷の張った川の上で遊んでいた犬を射ち殺しました。だが、氷がうすくなつて危険であつたため、あきらめてそのままに帰つてしまいました。背に腹はかえられず、柴家では、その犬を飼主からもらいうけて、主食のたしにすることになりました。その日から、来る日も来る日も犬の肉の食事でした。はじめはうまいとも感じましたが、塩で煮ただけで味もなかつたので、とてもながく食べられるものではありませんでした。ついにのどが通らず、口に入れただけで吐気をもよおすまでになりました。